HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『冥途の飛脚』考 : 封印切の背景
Author(s)	冨田, 康之
Citation	国語国文研究, 122, 1-14
Issue Date	2002-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93726
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_122_01-14.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『冥途の飛脚』考
――封印切の背景――

冨田康之

はじめに

これまで『冥途の飛脚』（正徳元年七月以前・竹本座初演）に対しては、「善意による悲劇の招来という葛藤を描こうとし、封印切りという他と比較にならないほどの大罪を素材にすることで、それを合理化するために重友博士以来指摘されている破綻を招いていると考えられる」[注1]と述べられているように、作品内部に破綻（矛盾）の存することが認められてきた。重友毅氏は封印切に至る過程に対し、「八右衛門や梅川の不審な言動が支えとなっており、いいかえれば、そのような不手際を代償として、この場面の成功がもたらされたのであることを忘れてはならないのであり、それはまた、作者がいかに忠兵衛本位で、この巻の筆を執ったかを知らしめるものであ」るとしている。[注2]

この様な考え方に対する基本的前提としてあるのは、八右衛門が悪人ではないという捉え方であった。それは近松の『冥途の飛脚』製作の意図として、「敵役を設けぬ『重井筒』を制作し得たことは、おそらく彼にとって会心のことであったに相違なく、またそのことは、ここ（『冥途の飛脚』＝筆者注）に再び敵役を混えぬ作品の制作を意図せしめたと思われる」[注3]という理解や、また、「これは「冥途の飛脚」の前後の作品「心中刃は氷の朔日」の親方利右衛門や「今宮の心中」の隠居貞法の例から考えると、主人公への好意が逆に主人公を悲劇へ追い込む例という点で共通している」[注4]という近松世話浄瑠璃の展開論の中で当然の事として認められてきたことに拠ると思われる。

では『冥途の飛脚』に於いて、果して八右衛門を矛盾なく解釈することは本当に不可能なのであろうか。また、八右衛門は善意を基本として捉えることが妥当なのであろうか。本稿では、忠兵衛と八右衛門に焦点を絞って封印切を行なった背景をもう一度再検討してみたいと思う。

一　大和新口村出身と養子

中之巻、封印切に至る場面では、八右衛門の言動が忠兵衛の封印切を導くことになる。しかし封印切は八右衛門と忠兵衛の両者の緊張関係から成り立つことは言うまでもない。忠兵衛は梅川の「情なや忠兵衛さまなぜそのやうにのぼらんす。そもやくるわへくる人のたとへ持まる長者でもかねにつまるは有ならひ。こゝのはぢははぢならず何をあてに人のかね。ふうをきつてまきちらしせんぎにあふてろうひつの。なはかゝるのといふはぢとかへらるか」[注5]という諫めをも聞き入れず何故封印を切ってしまうのか。勿論、八右衛門の執拗なまでの悪口が原因となるのではあるが、それをも忍耐強く遣り過ごすことが出来なかった忠兵衛の資質の側からの問題は残る。

その問に対して白方勝氏は忠兵衛の「一分」の問題を取り上げた。[注6]白方氏は「封印切は忠兵衛の一分の意識過剰のもたらせた悲劇として構想されているのである。」とし、忠兵衛について「何につけてもよい男である彼は、よい男が侵されることを、つまり恥をかくことを極端に忌避する」と指摘している。首肯すべきものと思われる。そこで、これよりもう一つ踏み込んで、その様な性格がどのようにして構想されてきたのか、その背景を考えてみたい。まず、上之巻冒頭部から検討しよう。

身をつくし難波にさくや此花の。里は三すぢに町の名も佐渡と越後の相の手を。かよふ千鳥の淡路町亀屋の世つぎ忠兵衛。こ

とし廾の上はまだ四年いぜんに大和より。敷銀もつて養子ぶん後家妙閑のかいほう故。あきなひ功者駄荷づもり江戸へも上下三度笠。茶のゆはいかい碁双六のべにかく手のかどとれて。酒も三つ四つ五つ所もん羽二重も出ずいらず。無地の丸つばぞうがんの国ざいくにはまれ男。色のわけしり里しりて暮るを待ずとぶ足の。飛脚宿のいそがしさ荷をつくるやらほどくやら。

冒頭部は忠兵衛の紹介が語られる。「ことし廾の上はまだ四年」と年齢に続け、「大和」出身と「養子」の身分とを述べる。更に商いばかりではなく諸芸に優れ、理想的な人物像を展開する。容姿についても「大和」出身にも拘らず「国ざいくにはまれ男」と描き出す。この部分は『冥途の飛脚』(『日本古典文学全集』の『近松門左衛門集二』所収・昭和50年8月・小学館)の頭注では、「忠兵衛の出生が田舎で、まれないい男であることをきかせる」と説明されている。一見すると、この紹介部分での忠兵衛の評価は、後に展開する「封印切」という公金横領の大罪を犯すものとは結び付かない設定である。しかし、その中に紛れ込むように表現された「大和」出身と「養子」の身分であるという紹介は注意すべきであろう。近松の他の世話浄瑠璃中で、冒頭部に「田舎者」で、且つ「養子」であるという紹介がなされる作品はない。ここでの表現は、本来、田舎者にはいい男が「似つかわしくない」という前提が存するのである。よってここでは、「大和」は「国ざいく」という表現とも響き合い、忠兵衛が田舎出身であることを鮮明に印象付けているとも考えられる。

もう一つ同様の個所が上之巻から指摘できる。冒頭部に続き、店の忙しい慌しさが語られ、そこに為替銀を催促する屋敷の侍、続い

て中の島丹波屋八右衛門からの使いの者が登場する。手代達が相手をして使いの者が引き揚げた後、忠兵衛義母妙閑が金の催促を不審に思いつつ登場し、次のように語る。

おやじの代から此家にかね壱匁のさいそくゑず。終に中間へなんぎをかけず十八軒の飛脚屋の。かゞみといはれた此亀屋。みなは心もつかぬか。忠兵衛か此比のそぶりがどふものみこまぬ。昨今の者はしるまいがじたい是の実子でなし。もとは大和新口村。勝木孫右衛門と云大百姓のひとり子。母ごぜはお死にやつて継母がゝりのわざくれに。悪性狂ひも出来るぞとてゝごせのしあんで是の世とりにもらひしが。せたいまはり商買ごと何におろかはなけれ共。此比はそは〳〵と何も手に付ぬと見た。（傍線筆者）

ここで語られる内容は冒頭部の忠兵衛の紹介と同様である。実子ではなく「養子」であること、「大和新口村出身」であること、また、「せたいまはり商買ごと何におろかはな」い人物であること。そしてそれに「此比はそは〳〵」と何も手に付かぬ」様子が付け加えられる。しかしながらここでは、特に知らせる必要もない「昨今の者」にまで「じたい是の実子でなし。もとは大和新口村。勝木孫右衛門と云大百姓のひとり子」と知らせているのである。継母ではあると言え、忠兵衛の親である妙閑から、この「大和出身」という出自と「養子」の身分を繰り返し述べることはそれなりに注意を払うべきであろう。

また、中之巻の八右衛門の忠兵衛に対する悪口の中にも、次のように語られている。

尤千両二千両。人のかねをことづかりしばしのやどをかすけれ共。手がねとては家やしき家財かけて十五貫目。廿貫目にたらぬ身代。大和の親が長者でも。亀屋へ養子にこすからは高のしれた百姓（傍線筆者）

ここには八右衛門の忠兵衛に対する一種の蔑みの感情が見て取れる。取り立てて「大和」の「百姓」を言わなければならない所でもなかろう。また、「養子」の身分であることも敢えて言う必要もない筈である。後に説明するが、この時点に於いて、八右衛門は忠兵衛に対して幾らでも罵倒できる種を持っていたのである。それにも拘らず、近松が都合三度の「田舎出身」と「養子」という状況を語らせた事は、何らかの意図を感じさせるものである。

では、忠兵衛はこの田舎出身である点をどの様に捉えているのであろうか。上之巻で八右衛門から為替銀を請求された時、忠兵衛の応答部分に次のようにある。

しつての通梅川が田舎客。かねずくめにてはり合かける。此方は母手代の目をしのんで。わづか二百目三百目のへつり銀。をひたをされていきた心もせぬ所に。請出す談合極まつて手を打ぬ計と云。〈中略〉そなたへ渡る江戸がねがふらりとのぼるを何かなしに。ふところにをしこんで新町迄一さんに。どふとんだやら覚えばこそ段々宿を頼んで。ゐなか客の談合やぶらせこつちへね引の相談しめ。かの五十両手付にわたしまんまと川を取とめしも。

ここで梅川の客を「田舎客」と呼ぶ忠兵衛の意識はどのようなものであるだろうか。それは自分が田舎出身であるにも拘らず、他の

田舎者を見下す程の自信が見て取れるのではなかろうか。その自信は、商才ばかりではなく、諸芸に通じ、既に都会の人々よりも都会的に振舞う事のできる所の裏付けから来るものと思われる。しかしながらその忠兵衛の認識は、同時に自分が田舎出身であることを強固に意識した裏返しのものと言えるのではなかろうか。

白方氏が「何につけてもよい男である彼は、よい男が侵されることを、つまり恥をかくことを極端に忌避する」「忠兵衛の一分の意識過剰」と言うのは、忠兵衛の周囲から執拗なまでに繰り返し語られる「田舎出身」と「養子」の身分という負い目が背景となっていると考えられるのである。[注7]

ところで、もう一箇所この「田舎出身」と「養子」の身分が語られる場面がある。それは中之巻で、八右衛門に自尊心を打ち拉がれ、前後の見境なく忠兵衛が封印切をしてしまった後の部分である。

忠兵衛気もうちやう天。前後くゝらぬまにあひむしろしきがねのこと思ひ出し。はてやかましい。此忠兵衛をそれほどたはけと思やるか。此かねは気遣ない八右衛門もしつてゐる。養子にくる時大和から。敷金にもつてきてよそへあづけをいた金。

封印を切った金の出所の言い訳である。自尊心を砕かれた後に「養子にくる時大和から。敷金にもつてきてよそへあづけをいた金」と「大和」の名と「養子」の身分を劇中で始めて忠兵衛自らが言い出すのである。「ヤレ命いきやふと思ふて此大じがなる物か。」という決意を以って封印切の大罪を犯した忠兵衛には、もはや自尊心も無意味なものとなっていたのである。忠兵衛にとって最も触れたくない自身の「引け目」を自ら言い出した事は、ここに至ってようやく忠兵衛は自らの「過剰意識」という柵から解放されることになるのではなかろうか。田舎出身であることを再認識した忠兵衛は、それがまた下之巻で忠兵衛の出身地である「大和新口村」へ忠兵衛梅川を向かわせる構想と連動していると思われるのである。

二　中之巻の八右衛門

八右衛門の人物像については、先に挙げた重友氏、向井氏の他にも、廣末保氏が「八右衛門という人物は、この『心中刃は氷の朔日』で試みられた親方の設定から引き出されているとも言える。またもし、『今宮心中』が、『冥途の飛脚』よりあとの作品だとすれば、この八右衛門が由兵衛に繋つてゆくとも考えられる。假りに、この時代順が若干變更されたとしても、この段階で、近松が、八右衛門的或は由兵衛的人間をとらえようと試みていることは推測できる」[注8]と指摘している。『冥途の飛脚』の前後の作品に見られる人物像から八右衛門を捉えるという方法はそれなりに説得力を持つ物と言える。ところが、中之巻で八右衛門が登場する場面については、もう一つ別の関係を見出すことも可能である。それは『曽根崎心中』の九平次の登場場面との関係である。『曽根崎心中』天満屋の場[注9]の九平次と『冥途の飛脚』中之巻の八右衛門の登場場面とを比較してみたい。

かゝる所へ九平次はわる口中間二三人。ざとうまじくらどつときたり。ヤアよねさまたちさびしさうにござる。なにときやくになつてやらふかい。なんとていしゆ久しいのと。のさばり上ればそれたばこぼんおさかづきと。ありべかゝりに立さはぐ。

イヤさけはおきやのんできた。扨はなすことが有。これのはつが一きやくひらのやの徳兵衛めが〈中略〉一ぶんはすたつた。きやうこうこゝらへきたる共ゆだんしやるな。みなにかうかたるのも徳兵衛めがうせまつかいさまにいふとても。かならずまことにしやるなや。よせることもいらぬもの。とうでのへかとびたものとまことしやかにいひちらす。（『曽根崎心中』天満屋の場）

中の島の八右衛門九軒の方より浄るり聞付。ヤア皆聞しつたよねのこゑ〳〵くはしや内にかとつゝと入。ゑさしばゝきさか手に取二かいの下から板敷を。ぐはた〳〵とつきならし。女郎衆あんまりじやこゝにも人が聞てゐる。いか成男でそれ程に恋しいぞ。男がなふてさびしくはおきにはいらずと。是にも一人かしてやろかとわめきける。〈中略〉ヤア千代とせ様なるとせ様。れき〳〵の御参会。梅川殿はよひの口島屋をもらふていなれたげな。忠兵衛もまだ見へそもない。くはしやこゝへよらつしやれ。女郎衆もかぶろ共も忠兵衛がことに付。みゝうつて置ことが有こゝへ〳〵とひそ〳〵すれば。ハアヽ何ごとやら気遣なといへ共二かいの梅川に。わるいうはさもきかせんかと皆きをくばる折ふしに。〈中略〉大門口にさらされ友だちの一ぶんすてさする。人でなしとはあれがこと。かはゆくはよせてくださるなとかたるを〈後略〉（『冥途の飛脚』中之巻）（以上、傍線筆者）

傍線部の対応を見れば、八右衛門が九平次と非常に似通った内容の発言・描写がなされていることが分かる。というよりも、近松は八右衛門の登場を『曽根崎心中』の九平次の登場部分を再利用していると言えよう。勿論、九平次は徳兵衛を罠に掛けて金を騙し取った人物であり、法的にみても罪人（悪人）であることは間違いない。一方、八右衛門は忠兵衛に対してその根底に善意を以って対応していると考えられてきている。しかしながら、八右衛門の登場からすれば、なぜ悪人九平次の登場場面を踏まえて作られたのかが疑問として残る。単に八右衛門の登場場面でたまたま九平次の場面を利用しただけで、他意はないのであろうか。そこで、今度は退場の場面も検討してみたい。

『曽根崎心中』の九平次が退場する場面では、「さうばがわるいおじやいの。こゝなよねしゆはゐなことで。をれらがやうにかねつかふ大じんはきらひさうな。あさやへよつて一はいしてぐはら〳〵一ぶをまきちらし。そしていんだらねやすからふアヽふところがをもたうて。あるきにくいとわるくちだらけいひちらしわめいてこそはかへりけれ」と表現されている。『日本古典文学全集』（前掲）の頭注では、「こゝなよねしゆはゐなことで」以下の文章に対し、「九平次のお初に対するあてこすり。」とある。他方、『冥途の飛脚』の八右衛門の退場場面は、「たゞさへもらふ此小判かやす物をいはれぬじぎ。五十両慥に請取た手がたかへすとなげ出し。梅川殿よい男持てお仕合。よね様達是にとかねくはい中し出ければ。」（傍線筆者）と記されている。八右衛門の場合も九平次同様に「あてこすり」をして退場するという共通点が指摘できるのである。勿論、九平次は登場後に徳兵衛の悪口を言い散らし、同様に八右衛門も忠兵衛の悪口を言い立てることも共通しているのである。と言うことは、登場から退場に至るまでの九平次と八右衛門の行為は全く同種のものと判

断されるのである。このことは何を意味するのであろうか。一方では九平次が悪意の人物として描かれているのに対し、同様に造形される八右衛門を果たして善意の人物として認定して良いのかという疑問が残る。

一体、八右衛門の人物造形に関しては、これまでも色々と考察されてきた。その中でも藤田悠紀子氏は「廓」という場の中で「競争意識」を指摘した。[注10]

何とかしてあの男（忠兵衛＝筆者注）が、商人として立ってゆけるように考えてやっている。こう考えていながら八右衛門は友人の弱點をさらけ出し、そのことにより自分の「男」らしい行為を吹聴し、證據物を出して皆の關心の中心になって得意になる。外見も教養も性格も忠兵衛とはちがい、金も派手に使わない八右衛門は、廓ではいつもたいこで、もてもせず一座の中心にもなれない。八右衛門は忠兵衛に悪意はないのだが、競争意識は持っている。

「廓」という特殊な場だからこそ、「八右衛門は忠兵衛に悪意はない」のだが、「競争意識」故に忠兵衛の「弱點をさらけ出し」てしまうという考え方である。この指摘は首肯できるし説得力もある。恐らくその様な面も十分にあったことは確かだろう。但し、そのような説明でもやはり登場・退場の場面までも九平次と重ね合わせた作為の説明には十分とは思われない。

さて、この問題を考える為に、もう一つ解決しておかねばならない点があるように思われる。それは既に何度も指摘されている疑問点であるが、中之巻の八右衛門の登場時に於いて梅川が身を隠す原因についてである。まず、本文を見てみたい。

きよ様下なは誰さんじや。イヤ大じござんせぬ中の島の八さまと。聞より梅川はつとして是々あのさんにはあひともない。皆様おりて下さんせわたしが二かいにゐることを。必々いふまいぞ。そこらはすいじやと打うなづきみな〳〵ざしきに出ければ。

この場面で梅川が八右衛門から身を隠す理由としては、藤田氏は「感じ易い梅川にとっては、頭痛の種になる人種であったにちがいない。その上十數日前から忠兵衛は八右衛門を避けている。敏感な梅川は戀人の心を感得し、おのずから八右衛門を避けるようになったものと思われる」[注11]という様に解釈している。また、重友氏の「この梅川の反発は、何か急な変化であり、余人には探り得ぬ秘密の理由があるとしなければならぬが、本文を隈なく眺めても、前にも後にも、それを思わせるはもとより、それを匂わせるものすらない。そこから本文をはなれて、勝手な臆測を加える評者も出て来るのではあるが、それは全く無意味なことといわなければならない」[注12]という考えもされてきた。

勿論、劇の構想上、梅川が後に「立ち聞き」をしなければならなかったからと理由付けることも可能であろう。しかし、それでは構想が優先された為に梅川の行為が不自然なものとして理解せざるを得なくなる。この部分は近松の失敗であったと評価するのはたやすいが、そう結論する前に、やはり矛盾なく理解するための一応の検討は必要と思われる。

まず、八右衛門と梅川との関係を考えてみるべきだが、廓での客と遊女という以外、両者の関係は具体的に描かれていない。ただ、

忠兵衛が封印を切った後で梅川が梯子を駆け下りた時、「なふすつきりわしが聞ました。みな島八さまのがお道理じや」と忠兵衛に語り掛ける。「島八さま」との愛称で呼ぶ関係であることは確認できる。中之巻の八右衛門の登場時、「中の島の八さま」ときよが答えた表現よりは若干くだけた表現となっている。両者の違いに親疎は認められないとしても、顔見知りであることには違いない。それ以上の関係は表現されていない。では、忠兵衛と八右衛門との関係はどうであろうか。忠兵衛と梅川との関係から考えれば、忠兵衛と八右衛門との関係は梅川の知るところのものであろう。ここに梅川が八右衛門に「あのさんにはあひともない」と言わしめた理由を推測させる可能性も考えられる。そこで一先ず忠兵衛と八右衛門との関係を、彼らの言葉から検討してみたい。

上之巻で忠兵衛が八右衛門と出会い、為替銀の催促を求められる場面で、八右衛門は「そちが商売は三度でないか。身が方へのぼつた江戸がはせの五十両は何としてとゞけぬ。五日三日は了簡も有ぞかし。心やすいは各別高だちんかくからは大じの家職。十日にあまれど埒明ず」と言っている。ここでは忠兵衛と八右衛門は「心やすい」関係であることが分かる。また、忠兵衛の弁解には、「かの五十両手付にわたしまんまと川を取とめしも。八右衛門と云男を友達に持し故と。心の内では朝ばんに北にむかひておがむぞや。去ながらいかに念比なればとて。さきにことはりたてをいてつかへばかるも同前〈後略〉」と言う。「八右衛門と云男を友達に持し故」、「いかに念比なればとて」とあり、「友達」で「念比」である関係が知られるのである。

更に、中之巻では、八右衛門が忠兵衛の悪口を言う場面で、「ろくなことは出かさずかたこびんそりこぼされ。大門口にさらされ友だちの一ぶんすてさする。人でなしとはあれがこと」とあり、八右衛門自身が忠兵衛を「友だち」と呼んでいる。続いて、忠兵衛は八右衛門の悪口に堪え切れず登場し、八右衛門に抗弁する場面では「をいてくれ気遣すな五十両。や百両。友達にそんかける忠兵衛ではござあらぬ」とあり、「友達」という言葉を用いている。これらのことから忠兵衛と八右衛門は通常「心やすい」「友達」という関係が成り立っていたものと考えられる。

さて、そうなると梅川も八右衛門のことを忠兵衛の「心やすい」「友達」として理解していたことは充分考えられる。忠兵衛は上之巻で八右衛門に対し、出会った折に「れそが言伝したぞや。近日一座いたしたい」と言っている。忠兵衛が廓からの八右衛門への言伝をしていることから見れば、廓の中での忠兵衛と八右衛門の関係が知られよう。但し、この言伝の真偽は定かではない。八右衛門に言い逃れすべき引き合いに出されたまでかも知れない。ただ、ここでは廓の内での両者の関係が知れればよい。そう考えれば、やはり梅川は八右衛門を忠兵衛の「心やすい」「友達」として認識していたことはほぼ間違いない。では、梅川が自分の大切に想う忠兵衛の「心やすい」「友達」が現れた時、なぜ「あのさんにはあひともない」と言わなければならなかったのであろうか。

廣末氏はこの場面で「八右衛門のようなタイプを、女の眼は見抜くと言うのであろうか。近松はここにも伏線をしいているかも知れない。ともかく、梅川は別に、八右衛門を友情にあつい男だなぞ

と思つているわけではない。[注13]」と推定する。先に挙げた藤田氏も「敏感な梅川」と指摘し、廣末氏と共通点が見られるが、廣末氏はもう一つ「伏線」の可能性を示している。そこで、この示唆に拠りながら、これより該当部分を分析してみたい。

まず梅川が「きよ様下なは誰さんじや」と問う。その問いにきよ(詞)が「イヤ大じござんせぬ中の島の八さま」と答える。その返事に「聞(地)より梅川はつとして是々あのさんにはあひともない」と身を隠すことになる。ここではなぜ梅川が「はつと」するのか。そして「皆様おりて下さんせわたしが二かいにゐることを。必々いふまいぞ」と頼んだ時、それに対して「そこらはすいじや」と「打うなづ」いたのかという点が疑問である。

ここで注目したいのは「はつとして」の「はつ」の部分の強調的に語る墨譜である。なぜ「中の島の八さま」と聞いてすぐに梅川は「はつと」としなければならなかったのか。そして「皆様おりて下さんせわたしが二かいにゐることを。必々いふまいぞ。」と「必」の部分の強調的語りによって示された依頼に対し、皆は何を推量して「そこらはすいじや」と「打うなづ」いたのか。勿論、ここでは梅川が八右衛門の所へ渡す為替銀を忠兵衛が流用したことは知らないはずである。知っているならば梅川が八右衛門を避ける理由には十分であろうが、立ち聞きの最中に事の真相を知った時、「二かいには。かほをたゝみにすり付てこゑを。かくして泣ゐたり」とあり、この時に初めて知り得たと考えるのが当然である。では、その他の理由として何が考えられるのだろうか。

遊女と客との関係に於いて「あひともない」という心理はどのようなものであろうか。近松の他の世話浄瑠璃中で遊女が客を避けようとする場面は『心中天の網島』（享保五年十二月初演）上之巻に見られる。上演年次が『冥途の飛脚』に遅れる点、また状況が異なる点に問題はあるが、遊女が客を避けようとする関係が見てとれるのである。

紀伊国屋の遊女小春が侍客に呼ばれ河庄方へ向かう途中、すれ違った遊女と挨拶する所、小春は「ふしぎにこよひは侍しゆとて河庄かたへおくらるゝが。かういく道でももし太兵衛にあはふかと気遣さ〳〵。かたき持同然の身持。なんとそこらに見へぬかゐ」と問う。相手の遊女に「そんならちやつとはづさんせ」と促されるものの太兵衛に見つけられてしまう展開となる。太兵衛は連れ衆に「つれしゆ。内々咄た心中よしいきかたよし床よしの小はる殿。やがて此男が女房に持か。紙屋治兵衛が請出すか。はり合の女郎」と紹介する。『心中天の網島』での太兵衛は、小春を紙屋治兵衛との「はり合の女郎」としているが、まったく小春に横恋慕する人物として描かれているのである。これをそのまま『冥途の飛脚』の部分に当てはめることは適当ではないが、遊女が客を避ける状況を推測する一つの契機と考えられないだろうか。

重友氏が「そこから本文をはなれて、勝手な臆測を加える評者も出て来るのではあるが、それは全く無意味なことといわなければならない」と注意を喚起したが、「本文をはなれ」る迄もなく、実は「梅川はつとして是々あのさんにはあひともない。皆様おりて下さんせわたしが二かいにゐることを。必々いふまいぞ」という表現の中に、既に恐らく八右衛門が梅川に「言い寄った」事件を想定させるに十

分な示唆を含んでいたのではなかろうか。そして「あのさんにはあひともない」と言った梅川は、その八右衛門の「言い寄り」に対して拒否の態度を取ったことを意味していると思うのである。更に言えば同輩の遊女が「イヤ大じござんせぬ中の島の八さま」と言っているが、この「言い寄り」の事件は他の遊女にはまだ知れ渡っていないことが推測される。つまり梅川と八右衛門との二人に限定された秘密としてあることが理解できる。また、以前までは梅川と八右衛門とはそういう関係ではなかったと推測される。それは、同輩の遊女が「大じござんせぬ」と言っており、そう遠くない以前までは梅川にとっても八右衛門は「大じ」ない人物として存在していた事をうかがわせる。[注14]ということは、八右衛門の梅川に対する「言い寄り」は、極最近にあったと推測されるのである。それ故に同輩遊女がその事情を察したからこそ「そこらはすい（粋）じや」と応じたのではなかろうか。こうした捉え方が廣末氏の言う「伏線」としたならば、八右衛門の中之巻の退場部分と連動していることに気付く。それは、先にも触れたが、八右衛門の「梅川殿よい男持てお仕合。」という皮肉である。この一言は、言わずもがなの内容である。対立関係にあった忠兵衛にこそ皮肉を浴びせるべき筈のものである。しかし、敢えて「みな島八さまのがお道理じや」と八右衛門の側に加担する発言をした梅川に皮肉を浴びせているのである。勿論この退場場面で八右衛門の忠兵衛に対する発話はない。梅川に向けられた皮肉なのである。

しかしながらこの「言い寄り」は、八右衛門の梅川に対する深い思いからされたものではなかろう。忠兵衛への悪口の中で「此八右衛門もわかいものゝならひ。一年に五百目一貫目あげ屋の座敷もふまねばならぬ」と語る八右衛門は、廓での遊び方を熟知した人物として設定されているからである。決して忠兵衛のように遊女に深入りすることはなく、飽くまで「遊び」の範囲を逸脱することはない人物である。しかし「遊び」とは言え、「北ばまうつぼ中の島天満の市のかは迄。おやじ共いはるゝ八右衛門」と名乗り、「丹波屋の八右衛門男じや」と自認する人物設定からすれば、梅川に「言い寄り」を拒絶されたとしたら一分も廃れ、その憤りも甚だしいものがあったのではなかろうか。

藤田氏の指摘したように、「廓」という場での「競争意識」は十分にあったと思われる。但しこの作品の場合、そういう一般論で割り切ることは十分ではないと思われる。これはやはりもう一歩進んで、梅川と八右衛門個人の交渉を前提として理解しなければならないのではなかろうか。

廣末氏は、八右衛門の悪口を分析しながら「どこかに額面通り素直に聞いてしまえないところがある。」と指摘しつつ、また、一方では「八右衛門はどこまでもよい男である。」とし、「一體、なぜ八右衛門が、場合によつては大變いやらしくもなるこうした友情を忠兵衛にほどこさねばならないか、それもよくわからない。ともかく、表面は確かに立派づくめであるが、どこかいやらしい奴だと思わざるをえない、そういう人物を漠然と感じさせる。漠然というのは、近松はそういう性格を書ききつていないし、意識的には善意の人間として肯定し乍ら、それでは成りたたないから、いやな面を妥協的にとり込んでいるからである。そうすることで、辛うじて、封印切

という決定的な忠兵衛の行為を觸發させる力をつくり出そうとしているのである。[注15]」と分析している。しかしながら、「意識的には善意の人間として肯定」するという前提を全く逆転させ、八右衛門に悪意を認めるならば、この部分は全く無理なく解釈できるのである。八右衛門は梅川への何らかの事件に対する悪意の感情を、忠兵衛に対して爆発させたものと考えれば、全て自然な展開となる。八右衛門は悪意を含みつつ、正義を盾にしながら話をすることにより、常に善人の位置を保持しつづけることが出来る。廣末氏の言う八右衛門の「いやらし」さの原因は、一般的な「廓」という特殊な場での「競争意識」という次元を越えて、八右衛門個人の具体的な「悪意」を背景として生まれてくるのではなかろうか。

以上のように考えた場合、問題となるのは上之巻の八右衛門の態度である。そこでこれより上之巻の八右衛門の言動を検討してみたい。

三　上之巻の八右衛門

上之巻と中之巻との八右衛門像は、「大別すると次の二つの意見になる。第一は敵役ではないにくまれ役として新しい人間像がこゝに創造されたという見方（大久保忠国氏等）第二は上巻と中巻での性格・言動の矛盾を認める見方である。大久保氏は上・中巻の矛盾は必ずしも分裂ではなく、特異ではあるにしても統一しうる人物として考えておられるわけである。八右衛門が敵役でないことは諸研究家の一致するところである。しかし、敵役的役割を果たしているこ

ともまた間違いはない。また俠気のあるおやじとして描かれていることも事実である。[注16]」という捉え方がされてきている。大久保氏を含め、何れにしても「善意」を基本とした考え方である。では、これまで述べてきた様に八右衛門に「悪意」を認めるならば、上之巻と中之巻での八右衛門は果たして統一的に捉えることが可能であるのだろうか。

上之巻に於いて八右衛門を「善意」の人物として印象付けている最たる理由は、忠兵衛が梅川の身請け金の一部に八右衛門の所に届く筈の為替銀五十両を流用したことを告白し、それを八右衛門が「了簡して待てや」ったことにある。そこで、どのような経緯でそのような展開になったかを確認してみたい。初めに二人の出会いから検討しよう。

上之巻で忠兵衛が家に戻り辛くしている所、運悪く為替銀を受け取りに来た八右衛門と遭遇する。忠兵衛は口車に乗せて何とかやり過ごそうとするが、八右衛門は「北ばまうつぼ中の島天満の市のかは迄。おやじ共いはるゝ八右衛門。なぶつてよくはなぶられふがかねはけふ請取」と極めつける。八右衛門は自らを「おやじ」と名乗り、始めから忠兵衛に対して威圧的な態度に出る。無論、為替銀を受け取る権利を有する八右衛門にしては当然であろう。しかし、この二人の出会いの場面から、正義は常に八右衛門にあり、忠兵衛はその正義の盾に屈服し続けざるを得ない位置に規定される。更に先取りすれば、この関係は、五十両の鬢水入れの事件に発展し、益々その関係が強化されることになる。

さて、ここではしかし、忠兵衛の「言い訳」は実に八右衛門の心

を捉えている点に注目しなければならないだろう。八右衛門が忠兵衛の母親に為替銀の直談判に乗り込もうとすると、忠兵衛は言い訳を願う。すると、八右衛門は「又口さきですまそふや。梅川をだましたと男のいきはちがふた」と答える。八右衛門の「男」という言葉から引き出されるように、忠兵衛は八右衛門を「男」の位置に規定しようとする。忠兵衛は田舎客による梅川の身請けを阻止できた事を「八右衛門と云男を友達に持し故と。心の内では朝ばんに北にむかひておがむぞや。」と訴える。それに呼応するかの様に「丹波屋の八右衛門男じや了簡して待てやる。首尾よふせよ」と為替銀の遅延を了承してしまうのである。忠兵衛は八右衛門を「男」の位置に据えるだけでなく、自らを「此忠兵衛を人と思へば腹も立。犬の命をたすけたと思ふて了簡頼み入」とも願う。八右衛門を「男」という立場に据え、自らを「犬」の位置に蔑むのである。この事により「男」、あるいは「おやじ」と自負する八右衛門に、決して断れない状況を作り出しているのである。以上から見れば、八右衛門の承諾は「善意」から出たものと決定する事は留保すべき事となろう。「又口さきですまそふや。梅川をだましたと男のいきはちがふた」と宣言した八右衛門は、結果的に忠兵衛の思惑通りに為替銀受渡しの遅延を承諾させられているのである。

忠兵衛と八右衛門の二人が別れようとする所、再び忠兵衛が窮地に立たされる。内から忠兵衛の義母妙閑が八右衛門に気付き、招き入れるためである。しかしそこでも忠兵衛は、八右衛門をまた「男」の位置に祭り上げる。忠兵衛は、「男を立るそなたと見てせんかたなふて渡す金。さつはりと請取て母の心をやすめてたも。包はとくに及ぶまじいらふてみても五十両。どふしてたもる」と差し出す。すると八右衛門は、「手に取て。ハテ誰ぞと思ふ丹波屋の八右衛門。請取に子細はない」とここでも了承してしまうのである。

このように見てくるならば、八右衛門の登場前に忠兵衛が飯炊きのまんに家の様子を聞き出そうとして、「ぬれかけて。だましてとはん」とする場面が展開されているが、そういう知恵に長けた一面を持っている事と連動しているとも解釈可能となる。八右衛門は「口三味せんにのせかけてもの様な男でない」と忠兵衛に迫り、忠兵衛は事実を告白したものの、その告白には八右衛門が了承せざるを得ない細工が施されていたのである。尤も、忠兵衛がそれを意図的にしたものか、自然とそのような語り口になったのかは問題としない。ここでは八右衛門が拒否できない状況であったことを確認すればよかろう。

さて、ここまでの八右衛門の行為は「善意」かそうではないのかが判然としない。ところが、八右衛門と妙閑との応答の中に、一つの問題が隠されていると思うのである。その部分は、妙閑が忠兵衛に八右衛門の所に届いている金を渡すように促した時の反応である。

八右衛門もそこゐは聞是おふくろ。はづかしながら八右衛門が五十両や七十両。急に入こともなし是よりすぐに長堀迄参れば。明日でもと立んとすれば〈後略〉

ここで問題にしたいのは、「長堀」という場所である。八右衛門が咄嗟に答えた「長堀」という地名は、仕事上の都合と考えるには少々不自然である。忠兵衛が帰宅した頃は「待日も西のもどり足見せさ

し比に成にけり」という程であった。その後、忠兵衛とまん、更に八右衛門とのやり取りの後の時刻である。まして八右衛門は使いが手代に「かさ高」な返事をされ、「かねはけふ請取。」と決意して出かけてきたのであった。何らかの仕事のついでに忠兵衛の所へ立ち寄ったのではなかろう。とするならば、八右衛門が妙閑に答える地名は「長堀」ではなく、「北ばまうつぼ中の島天満の市のかは迄。おやじ共いはるゝ」と八右衛門自らが言っていたその地名こそが事実らしく聞こえた筈である。にも拘らず八右衛門は「長堀」と答えた。これは八右衛門がその時点で「新町遊廓」へ行く意志を持っていた為に、咄嗟の返答にその方向上にある「長堀」という地名を挙げてしまったのではなかろうか。中の島の八右衛門の家から「長堀」へ向かう場合でも、その途中に「新町遊廓」があることは既に指摘されている（前掲『日本古典文学全集』頭注）が、むしろ通常八右衛門が「新町遊廓」へ向かう「符牒」として「長堀」があったのではないかと思う。少なくとも八右衛門は「これから用事があるから」とだけ答えれば良かった筈である。「長堀」へ向かうという方向性を示したからには、観客は八右衛門がこれから「新町遊廓」へ向かう予想を十分に立てられることになる。万一予想できなかったとしても、中之巻で実際に八右衛門が廓を訪れる事実を見れば、「長堀」という行き先は、「新町遊郭」へ行く事であったと観客は再認識させられたのではなかろうか。

つまり、八右衛門は忠兵衛の申し開きを聞いた段階で、既に廓へ行ってこの一件を口外する意志があったと判断すべきであろう。中之巻で八右衛門が座敷に上がった途端、「アヤ千代とせ様なるとせ様。れき〳〵の御参会。梅川殿はよひの口島屋をもらふていなれたげな。忠兵衛もまだ見へそもない。くはしやこゝへよらつしやれ。女郎衆もかぶろ共も忠兵衛がことに付。みゝうつて置ことが有こゝへ〳〵とひそ〳〵すれば」という表現からは、八右衛門が忠兵衛の一件を真っ先に口外しようとした明確な意思が読み取れる。更に梅川と忠兵衛の留守を確信した上でのことである。もし八右衛門が真剣に忠兵衛を救おうという意志があるのならば、梅川にこそ忠兵衛の一件を知らせれば済む事ではなかったのか。この八右衛門の忠兵衛の一件の口外は、本来忠兵衛一人の留守を確認すれば済む事であったと思われる。いや、むしろ梅川一人にだけ知らせれば最も確実に忠兵衛を廓へ「よせつけ」ないことが出来たはずである。八右衛門は梅川の留守を確認しつつ登場したことは、梅川に対して聞かれたくない差し障りがあったと考えられる。上之巻で忠兵衛が八右衛門に申し開きをした後で、八右衛門が「いひにくいことよふいふた。丹波屋の八右衛門男じや了簡して待てやる」との言葉が、真実の気持ちから出たものであるならば、八右衛門は梅川一人にこの一件を知らせ、難局を乗り切る方法を示すべきであった。それが為されないことは、八右衛門のこの言葉はやはり親切ごかしのものであったと判断せざるを得ないのである。

「長堀迄」の意味を以上のように解せば、上之巻の八右衛門を善人とばかり規定されるものではなくなる。つまり、上之巻と中之巻の八右衛門の性格は矛盾なく連続するものとなるのである。

さて、これまで八右衛門が善人であるとする一つの大きな根拠は、「いすかのはしのくひちがふ心をしらぬぞぜひもなき。」の解釈で

あった。この解釈は、既に白方氏が、

短気（「たんきはそんきの忠兵衛」＝筆者注）と鶫の脊はこの効果をねらって、いわば観客を錯覚させるためのものであって、必ずしも忠兵衛の心情や封印切の真因を語ったことばではない。『堀川波鼓』においても、近松はお種の姦通をくり返し酒のためだと弁護したが、これも観客に対して同じ効果をねらったものであって、反面近松はお種が姦通を引き起しかねない可能性を彼女の性格と環境の中に具体的に描いた。作者のなまな詞を鵜呑みにすると、かえって作者の真意が見失われてしまうことさえある。

と指摘している。[注17]「作者のなまな詞を鵜呑みにすると、かえって作者の真意が見失われてしまう」という点について同感である。また、そのままこの部分を理解したとしても、正義を盾にする八右衛門は、行為としては忠兵衛を救う方向性を持っているのに対し、忠兵衛の行為が封印切を実行する方向性を持つものとしての「食い違い」を予告する機能を表しているのであって、いずれにしても八右衛門が心底善人であるとばかり理解する必要もないと思われる。

もう一つ、上之巻で忠兵衛が八右衛門に五十両の遣い込みを告白した時、八右衛門が「ほろりつと涙ぐ」んだという部分にも、八右衛門を善人と思わせる根拠となりうる。しかしこの点についても、藤田氏は「上の巻で忠兵衛に泣きつかれ、ほろっとし「首尾よふせよ」といっているが、相手の心を深く理解し同情しての詞ではない。優越感のようなものもちらついている。」と鋭く指摘している。[注18]この部分もまた八右衛門を純粋に善意の人としてばかり解釈する必要もないであろう。

八右衛門がもし純粋に善意で忠兵衛と梅川との仲を切らせようと考えているのであれば、封印切の場面で、八右衛門が忠兵衛に謝るなりして阻止することもできたのではないか。それが出来ないということは、八右衛門は心底から忠兵衛を助けようなどとは元々考えていなかったことの証しと思われるのである。

おわりに

以上、『冥途の飛脚』の封印切に至る背景について検討してきた。これまで、封印を切らせる力が八右衛門の善意と忠兵衛の一分の問題として考えられてきたように思われる。しかし、その考えに立てば疑問点が常に残されたままとなり、近松の無理がどうしても目立つものとなっていた。しかし、八右衛門と忠兵衛との対立は、実は八右衛門の善意ではなく、八右衛門の忠兵衛（直接的には梅川）に対する一つの屈折した「悪意」と、都会人より都会的な振るまいを身に付けた田舎者忠兵衛の劣等感がその背景にあったと考えられるのである。その背景の対立こそが封印を切らせる力になったと思われる。

ところで、八右衛門を善人か悪人か、あるいは「敵役」であるとか規定することの意味はあるのであろうか。『曽根崎心中』の九平次の行為は、明確に徳兵衛を罠にはめた犯罪であった。八右衛門はそういった犯罪行為を起こした訳ではない。八右衛門は当初、忠兵衛のいないことを確認した上で悪口をしたものであり、その行為が忠

兵衛を犯罪に駆り立てるとは思ってもいなかっただろう。客観的に見て八右衛門を悪人とまで呼ぶ必然性はないのである。もし、八右衛門をして悪人と呼ぶことができるならば、例えば『心中天の網島』の太兵衛は、「悪意」を持って治兵衛を殴打し、根拠も無く周辺に治兵衛が「ぬすみ」をしたと言い立てている行為からすれば、太兵衛もまた悪人として認めなければならなくなるであろう。横恋慕した人物がその腹癒せに起こした程度の行為である。そのように考えれば、本来悪人ではないであろう八右衛門が、悪意を隠し持ちつつ善意を盾に振舞う人格として設定されていることは、むしろ、善悪の役柄のうちに収まり切れない生身の人間を描き得たということであり、十分に評価しうるものと考える。

〔注〕

1 向井芳樹著「『冥途の飛脚』について」（『近松の方法』・昭和51年9月・桜楓社）参照。

2 重友毅著「『冥途の飛脚』の問題点―封印切と新口村」（『近松の研究』・昭和47年4月・文理書院）参照。

3 注2に同じ。

4 注1に同じ。

5 近松作品の引用は、以後『近松全集』（岩波書店）に依る。

6 白方勝著「冥途の飛脚」（『近松浄瑠璃の研究』・第三編世話浄瑠璃の展開・平成5年9月・風間書房）参照。

7 白方勝氏も注6前掲書の中で「そこには田舎出のコンプレックスが働いてもいようか。」との示唆はされているが、具体的な考証はなされていない。

8 廣末保著「『冥途の飛脚』封印切と新口村」（『増補近松序説』・三　世話悲劇の展開　その一・昭和32年4月・未来社）参照。

9 『曽根崎心中』は一段物であるが、「天満屋の場」は構成上、三巻構成の中之巻に当る。

10 藤田悠紀子著「近松の女性（その二）「冥途の飛脚」の梅川」（『近松門左衛門―研究入門―』・昭和31年8月・東京大学出版会）参照。

11 注10に同じ。

12 注2に同じ。

13 注8に同じ。

14 勿論ここで言う「大じござんせぬ」とは、一義的には、梅川が田舎客を嫌い島屋から抜けて来た訳であり、その迎えではないという意にとれる。しかし八右衛門が、万一梅川にとって別の意味で差し障りのある人物として知られていたならば、やはり「大じござんせぬ」とは言わなかったであろう。

15 注8に同じ。

16 注1に同じ。

17 注6に同じ。

18 注10に同じ。

（とみた　やすゆき・北海道大学教授）